

別添

瀬戸内国際芸術祭 2025

取組方針（案）

2023年9月10日

瀬戸内国際芸術祭実行委員会

目 次

第 1 章 瀬戸内国際芸術祭 2025 開催方針

- 1 - 1 芸術祭の根底にあること..... 1
- 1 - 2 これまで「海の復権」「じいさまばあさまの笑顔」などの
キャッチフレーズで語り、実践してきたこと..... 1
- 1 - 3 瀬戸内国際芸術祭 2025 に向けて
再び初心に還り計画を練り直し、活動を開始する..... 2
- 1 - 4 名称・会期・会場等..... 3
 - (1) 名称
 - (2) 会期
 - (3) 会場
 - (4) 主催

第 2 章 会場展開

- 2 - 1 方針..... 5
- 2 - 2 会場ごとの特色・コンセプト..... 5
- 2 - 3 アーティスト選考..... 15

第 3 章 受入環境の整備

- 3 - 1 方針..... 16
- 3 - 2 分野ごとの課題と整理..... 16
 - (1) 海上交通
 - (2) 島内交通
 - (3) 本土側のアクセス
 - (4) 混雑対策
 - (5) インバウンド対策
 - (6) 芸術祭鑑賞ツアー
 - (7) 案内所の設置
 - (8) 救急体制の整備
 - (9) チケット
 - (10) グッズ

第4章 連携・コラボレーション

4-1	方針.....	19
4-2	企業パートナー・協賛.....	19
4-3	連携事業.....	20

第5章 芸術祭サポーター

5-1	方針.....	21
5-2	ボランティアサポーター「こえび隊」.....	21
5-3	企業・団体ボランティアサポーター.....	21

第6章 広報

6-1	方針.....	22
6-2	具体的な取組み.....	22

第7章 スケジュール..... 24

「海の復権」

1-1 芸術祭の根底にあること

- ① 四国山脈と中国山脈が南北にそびえ、約1万2千年前から海水が入ってきて、紀伊水道、豊後水道、関門海峡に囲まれた瀬戸と灘が特徴である浅い海。その地形、気象を生かすこと。
- ② 約2万年前から大陸・半島・南西諸島からやってきた人々によって育まれた生業（なりわい）・生活・文化・歴史のうえに築かれた地域に現代の冒険者、見者であるアーティストが入ってきて作品をつくること。

これらの取組みが、この混迷し、母なる地球から離脱した現代社会に対して「私たちはどこから来て、どこへ行くのか？」という切実な問いを発してくれているのではないかと、というところから始まり、それが根底となっています。

1-2 これまで「海の復権」「じいさまばあさまの笑顔」などの キャッチフレーズで語り、実践してきたこと

[交流・学習]

アーティストは作品を制作する過程で住民から学び、地域は彼らやサポーターと交流することで拓（ひら）かれていく。

[協働]

さまざまな困難の中で、協議し、住民・サポーターが、その地の材料や生活技術を活かし、作品を制作する。

[感幸と観光]

それらの作品とともに、地域の食事をふるまい、案内し、祭りに参加してもらうことは、来圏者に対して土地の力を伝え、元気を与えると同時に、地域住民の誇りを呼び起こす。

これにより、芸術・文化をもって地域創生し、それが海外からのお客さま（インバウンド）を含めた観光の成功モデルとして国の政策のよりどころとなってきました。2022年の芸術祭のアンケートでは、半数を超える人々がリピーターで、これだけ根強い全国のファンがいることは望外のことであり、良かったこととして海（島）の光景、美術をそれぞれ約4割、ガイドの案内など地域とのふれあいを約1割の人が挙げています。まさに瀬戸内国際芸術祭は海・島の素晴らしさが美術によって際立った体験になっていることが分かります。

1 - 3 瀬戸内国際芸術祭 2025 に向けて

再び初心に還り計画を練り直し、活動を開始する

世界トップレベルの芸術祭になった今、これまで以上に、地域の人たちにとっての大切な生活実感、素晴らしい海や地域の風景、生活の技術をリストアップし、それらが生きていく誇りになるように活動していきます。瀬戸内国際芸術祭での体験は、都市の情報の中での興奮と刺激に比べて、どれほど豊かに五感・身体にかえってくるものか、それを多くの人たちに知っていただきます。空や海の様子に一喜一憂することがどれほど私たちの心を豊かにしてくれているか、そんな瀬戸内の世界を体験していただくように準備をしていきます。

また、より多面的な瀬戸内海の魅力を伝えるために、これまでの会場に加えて、香川県側の沿岸部に新たな会場を設けます。これにより、古来から船が行き交い、多様な文化を港から港へと伝えてきた瀬戸内海の歴史を浮かび上がらせるとともに、来場者の分散化を図ります。

[基本的な考え方]

(1) 美術に対する考え方や体験ということ、あらゆることのベースにおさえる。

(2) 地域(各市町)の考えに寄り添うこと、島の日常に関わることを丁寧に進めていく。

そのために、各市町が主体的にそれぞれの地域文化の掘り起こしを積極的に進め、計画段階から携わっていき、土地の原理を島全体で体験し楽しめるようにする。

そして各島に拠点となる場所や魅力的な作品を残し、活用していくことが、県や市町の大きな展望となっていくようにする。作品を活用していくために、恒久設置作品として残し維持していく仕組みを整えていく。

(3) 日本を含むアジアにおける美術のハブ(中枢)の位置を保ち続けることを意識する。

特に小豆島ではアジア諸国とのつながりを意識した作品計画とし、強力なイメージを打ち出していく。また、バングラデシュ(2013年)、タイ(2016年)に続き、アジアのいずれかと連携プロジェクトを実施する。

(4) 大島の将来展望に向けた計画(公園化)の検討に着手する。具体的には、五感が解放される遊び場をつくることや、日本と海外の子どもたちが一緒に参加し創り上げる芝居を発表することなどを瀬戸内国際芸術祭の一環として検討していく。

(5) 中西讃の島々は、各市町や地域のキーマンとの意見交換や勉強会を定期的にもち、それぞれの考えや主体性を大切に丁寧に、計画を立てていく。

また、島しょ部のみならず陸地部も活用することで、本土側から島への人の流れや、高松以外に滞在し、楽しむスタイルを作りだしていく。

(6) 芸術祭のアーティストが、制作現場で香川県内の中高生とワークショップを行ったり、学校で授業を行ったりするなど、将来を担う子どもたちがアートに触れ、自ら考える経験をすることにより豊かな心を育めるよう、学校教育との連携を深めていく。

1-4 名称・会期・会場等

(1) 名称

瀬戸内国際芸術祭 2025 (せとうちこくさいげいじゅつさい にせんにじゅうご)
Setouchi Triennale 2025

(2) 会期

季節	会期	日数
春	4月18日(金)～5月25日(日) ※各島休日を2日程度設ける	38日
夏	8月1日(金)～8月31日(日)	31日
秋	10月3日(金)～11月9日(日) ※各島休日を2日程度設ける	38日
合計日数		107日

【会期設定について】

会期は、過去4回と同じく、温帯地域の弧状列島である日本の大きな特徴である「四季」を海外の人々に知ってもらうため、春・夏・秋の3シーズンに分けて開催します。

春・秋会期については、島ごとに2日程度の休日を設け、作品や受入態勢の調整を行うようにします。

(3) 会場

直島、豊島、女木島、男木島、小豆島、大島、犬島、沙弥島(春会期)、本島(秋会期)、高見島(秋会期)、栗島(秋会期)、伊吹島(秋会期)、高松港周辺、宇野港周辺、香川県沿岸部(さぬき市内(夏会期)、東かがわ市内(夏会期)、宇多津町内(秋会期);具体的な会場は今後検討する)

(4) 主催

瀬戸内国際芸術祭実行委員会

会長：池田豊人(香川県知事)

名誉会長：真鍋武紀(元香川県知事)

浜田恵造(前香川県知事)

副会長：泉雅文(香川県商工会議所連合会会長)

：大西秀人(高松市長)

総合プロデューサー：福武總一郎(公益財団法人福武財団名誉理事長)

総合ディレクター：北川フラム(アートディレクター)

構成団体：香川県、高松市、丸亀市、坂出市、観音寺市、三豊市、土庄町、小豆島町、直島町、多度津町、玉野市、(公財)福

武財団、(公財) 福武教育文化振興財団、香川県市長会、香川県町村会、四国経済産業局、四国地方整備局、四国運輸局、中国四国地方環境事務所四国事務所、国立療養所大島青松園、香川県医師会、四国経済連合会、香川県商工会議所連合会、香川県商工会連合会、(一社) 香川経済同友会、香川県農業協同組合、香川県漁業協同組合連合会、香川大学、四国学院大学、徳島文理大学、高松大学、香川県文化協会、(公財) 四国民家博物館、(公社) 香川県観光協会、(一社) 日本旅行業協会中四国支部香川地区委員会、(公財) 高松観光コンベンション・ビューロー、香川県ホテル旅館生活衛生同業組合、四国旅客鉄道(株)、高松琴平電気鉄道(株)、香川県旅客船協会、(一社) 香川県バス協会、香川県タクシー協同組合、(公財) 香川県老人クラブ連合会、香川県婦人団体連絡協議会、(公社) 日本青年会議所四国地区香川ブロック協議会、香川県青年団体協議会、さぬき瀬戸塾／監事：(株) 百十四銀行、(株) 香川銀行／オブザーバー：岡山市、岡山県商工会議所連合会、岡山大学

※新たな会場の自治体は、2024年度から構成団体に加わる予定

第2章 会場展開

2-1 方針

アートはその地域の特徴をあきらかにし、来客者をその土地と結びつける働きをします。と同時に、その地域と、国、機関、学校、企業等とのつながりを生む機会をつくっていきます。これまでの芸術祭において蓄積されたアート作品を、会場ごとの特色を踏まえ、さらに発展させます。

各会場におけるアート展開を検討するに当たっては、地域に精通した地元市町の提案等も踏まえながら、各地域の活性化に関わるさまざまな関係者を交えて議論を行うことにより、将来への展望に沿いながら方向性を確認し、地域住民等との協力関係の下に作品の制作やイベントの運営等を行います。

2-2 会場ごとの特色・コンセプト

直島

[特色・コンセプト]

直島は瀬戸内海に浮かぶ周囲 16 キロの小さな島で、住民約 3,000 人が生活を送っている。古くは漁業や製塩業のほか、海運交易も盛んで瀬戸内海の交通の要衝として栄えていた。20 世紀に入ると、日本でも有数の銅や金などの製錬業により、近代工業の島へと発展を遂げてきたほか、現在では、アートによる地域振興の先端モデル地域として世界に知られる島となったが、その発端は、瀬戸内海の島に世界中の子どもたちが集える場をつくりたいとの思いを抱いていた福武書店（現・ベネッセホールディングス）の創業社長・福武哲彦と、直島に教育的な文化エリアを開発したいとの夢を描いていた当時の直島町長・三宅親連の思いが一致したことから始まっている。

現在は複数のアート施設が建設され、島との親和性と高い知名度により「アート」と「自然」が融合する島として認知され、海外のガイドブックや雑誌特集記事で「直島」が単独で紹介されるなど、知られるようになった。

[2022 までの取組み]

直島では、ベネッセアートサイト直島による「地中美術館（2004～）」や「ベネッセハウス ミュージアム（1992～）」、「家プロジェクト（1998～本村）」が、芸術祭の開催以前からベネッセハウス周辺で展開されており、以降についても次に挙げる施設・作品等が増え続けている。直島町が所有している「赤かぼちゃ（2006～宮浦港）」や「直島パヴィリオン（2015～宮浦港）」なども人気を博している。

また、芸術祭の第 1 回(2010)には、「直島銭湯「I♥湯」(2009～宮ノ浦)」、「李禹煥美術館（2010～ベネッセハウス周辺）」、第 2 回(2013)には「ANDO MUSEUM（2013～本村）」や「宮浦ギャラリー六区（2013～宮ノ浦）」、第 4 回(2019)には、「The Naoshima Plan「水」(2019～本村)」や李禹煥美術館の新たな屋外作品「無

限門（2019～）」、第5回（2022）には、直島で9番目の安藤忠雄建築の「ヴァレーギャラリー（2022～ベネッセハウス周辺）」、ベネッセハウスパークの中に新たにオープンした「杉本博司ギャラリー 時の回廊（2022～）」、宮浦ギャラリー六区で「瀬戸内「 」資料館（2019～宮ノ浦）」などがオープン、「The Naoshima Plan「住」（2022 宮ノ浦）」という建築展も開催された。また、イベント関係では、全国でも珍しい女性だけで演じる直島女文楽が第1回から全ての芸術祭で行われるなど、島の固有の文化の発信も行ってきた。

豊島

[特色・コンセプト]

古来より稲作をはじめとした農業や酪農、漁業が盛んな豊かな島であり、また、かつては、「豊島千軒、石工千人」と言われるほど石材業が盛んであった。2017年6月、不法投棄された産業廃棄物の処理が完了し、一つの区切りの時期を迎えている。

離島でありながら、かつては米を島外に出すほどの収穫があった肥沃な土地と地形、豊かな湧き水を生む原生林をもつこの島の特性を活かし、「食」と「アート」を掛け合わせることによって、「自給自足」「地産地消」の地域社会のあり方を発信することを目指して、豊島美術館とその周辺の美しい棚田を軸に、家浦、唐櫃、甲生の3つの集落などで作品を展開している。

[2022 までの取り組み]

食とアートで人々をつなぐプラットフォームとして、唐櫃地区に2010年に島キッチンを整備し、同年に、地元住民が再生した棚田の景観の中に水滴をモチーフにした「豊島美術館（唐櫃岡）」や「心臓音のアーカイブ（唐櫃浜）」が誕生した。その後も、生と死などをテーマに、「豊島横尾館（2013～家浦浜）」、「針工場（2016～家浦岡）」や「ささやきの森（2016～唐櫃岡・壇山）」などの作品も加わった。2022年には、甲生地区で富安由真「かげたちのみる夢（2022）」やヘザー・B・スワン+ノンダ・カサリディス「海を夢見る人々の場所（2022～）」を展開、唐櫃地区で「西本喜美子写真展（2022）」を開催した。また、同年、ままごとの「反復かつ連続」イベントを開催し、島キッチンでは芸術祭会期外も毎月、「島のお誕生会」が開かれ、住民と来場者の交流が生まれている。

女木島

[特色・コンセプト]

女木島は、高松市の北約4kmに浮かび、高松港からフェリーで約20分の位置にある。島の山頂近くに大きな洞窟があり、それが「鬼ヶ島伝説」の鬼の洞窟と言われ、鬼ヶ島として知られるようになった。島の風景を特徴づけるのが「オオテ」と呼ばれる高い石垣で、「オトシ」と呼ばれる冬場の強風から家屋を守っている。

島そのものの美しさを活かし、島の生活を体感できるよう、海・波・風・樹・光

等をテーマにした、五感を通して島の自然を体感させる作品や、休校中の小学校や空き家など、既存の施設を活かした作品を展開しているほか、島民や来島者も利用できるアートなお店も増加し、作品鑑賞のみならず、ショッピングや体験の要素も加わってきている。

[2022 までの取組み]

目に見えない風の形を視覚化した「カモメの駐車場（2010～女木港周辺）」や幻想的な光を反射する「均衡（2010～2016 女木集落）」、不在の可視化をテーマとした2作品「不在の存在（2010～女木集落）」、休校中の小学校を大胆に活用した「女根／めこん（2013～女木小学校）」、古い映画館をモチーフにした「ISLAND THEATRE MEGI「女木島名画座」（2016～女木小学校周辺）」、地域住民が描かれた「西浦の塔（OKタワー）（2016 西浦漁港）」、虚構と現実を混在させた「ランドリー（2019～寿荘）」、海の家を卓球場に変身させた「ピンポン・シー（2019～寿荘）」といった作品を展開してきた。

2022 年には、2019 年に人気を博した「島の中の小さなお店（寿荘）」プロジェクトに新しい作家と店舗を加え、魅力的なセレクトショップ「女木島名店街（2022～）」として進化させた。ここでは、廃棄されたものを照明器具に生まれ変わらせる「鬼ヶ島ピカピカセンター（2022～寿荘）」や、天井から作品を無数にぶら下げる「ガラス漁具店（2022～寿荘）」など、アート作品に囲まれる非日常を味わえ、さらにグッズの購入もできるお店を、寿荘や島内の空き家各所に登場させ、島に新たな風景を誕生させた。

男木島

[特色・コンセプト]

昔からこの島では、男性は海へ漁に行き、あとに残る女性が畑の担い手であった。また、どの家でも耕作牛を飼っており、農繁期には高松などの農家にその牛を貸す、借耕牛の習慣が1960年ごろまで続いていた。

島に連綿と続く漁村の生活に触れ、その息づきを体感できるよう、男木島独特の斜面に形成された集落を回遊し、石垣の路地などを利用して、島独自の空間を体験できる作品や、漁村の生活に触れることができるよう民家の土間などを利用した作品の展開を行っている。

[2022 までの取組み]

島を訪れた人を出迎える男木交流館の「男木島の魂（2010～）」を基点に、細い路地のところどころに点在する「男木島 路地壁画プロジェクト wallalley（2010～男木集落）」、海や空に溶け込むような青と白の立体作品「歩く方舟（2013～大井海水浴場周辺）」、古民家で織り成す影絵とサウンドオブジェ「アキノリウム（2016～男木集落）」、男木島に育つ植物等をモチーフにした「生成するドロイーイングー日本家屋のために 2.0（2019～男木集落）」、タコ壺をモチーフにした遊具「タコツボル（2019～男木港周辺）」などの作品を継続して展開した。

2022年は、2010年から毎回展示替えや作品追加を行っている川島猛とドリームフレンズの「瀬戸で舞う（2022～男木集落）」のほか、新たな作品として、作家がさまざまな人たちから聞き取った学校の先生のエピソードを基に描く「学校の先生（2022 男木集落）」や、2人の作家が瀬戸内の島々を舞台に展開したコラボレーション作品「男木島パピリオン（2022～男木集落）」などを展開した。2013年の昭和40年会の活動がひとつの引き金となり、一度は休校した小・中学校が2014年に再開、移住者が島に活気を与え、島の未来への希望が生まれている。

小豆島

[特色・コンセプト]

古くは「あずきしま」と呼ばれ、「古事記」にも登場する小豆島は、日本で初めてオリーブの栽培に成功して以来、栽培が盛んになり、「オリーブの島」として親しまれてきた。寒霞渓、エンジェルロードに代表されるような観光地としても有名であり、歴史と自然が調和した島である。

芸術祭では、それぞれの地区で特徴的なアートプロジェクトを展開してきた。また、福田の「福武ハウス」を中心にアジアにおける地域文化のコミュニティを通じた交流を行っている。

[2022までの取組み]

島の玄関口となる各港では、「太陽の贈り物（2013～土庄港）」や「再び …（2019～土庄港）」、「辿り着く向こう岸（2022 草壁港）」、「スター・アンガー（2013～坂手港）」といったランドマークとなる作品を制作してきた。三都半島では、地域住民と広島市立大学芸術学部との連携事業が営まれ、アートプロジェクトが継続的に展開されている。大部地区では、台湾の作家と地域住民が協働し、「国境を越えて・波（2019）」などを制作した。四海地域の沖之島では、独特な地理環境に溶け込む「OKINOSANG/元気・覇気・卦気（2019）」が制作され、鑑賞者が渡船で向かう形態も注目を集めた。「静寂の部屋（2019 馬木）」は、かつて醤油組合事務所であった建物で展示を行った。山間地域である中山地区では、2010年から5回連続で竹を用いた作品をつくっている作家が地元の人と協力して制作した「ゼロ（2022 中山）」などの景観に溶け込む作品が制作された。

2022年には、迷路のまち中での周遊作品として、土井健史「立入禁止（2022）」などが加わりにぎわった。アートと自然が融合する三宅之功「はじまりの刻（2022～屋形崎）」を瀬戸内海に沈む夕陽の丘に設置した。また、肥土山農村歌舞伎舞台では木下歌舞伎「竜宮鱗屑譚～GYOTS～」、池田体育館ではままごとによる「あゆみ（短編）」、福武ハウスでは「アジア・ギャラリー 時代の風景・時代の肖像+++（2022）」、「アジア・アート・プラットフォーム 2022 共同展 共に在る力（2022）」が展開され、イベントとして「葺田夜祭り」が開催された。公共交通の便のない福田-寒霞渓間では、会期中に臨時バスが運行され複数の作品を展開する福田地区から「空の玉/寒霞渓（2022～寒霞渓）」間のアクセスとして利用された。

大島

[特色・コンセプト]

白砂青松の美しい島の風景が残る大島。1909年にハンセン病の療養所である大島青松園が設立され、1996年に「らい予防法」が廃止されるまでの約90年間、国によるハンセン病患者の隔離政策が行われてきた。現在では、ハンセン病回復者に対する日常生活の支援が行われているほか、瀬戸内国際芸術祭を契機に増加した来島者に対しハンセン病を正しく理解するための活動が行われている。

2019年の芸術祭の開幕に合わせて官有船が一般旅客定期航路化され、入所者が長年希望していた社会交流会館がオープンした。

また、芸術祭を契機に高松市は大島振興方策を策定し、子どものためのサマースクールやラジオ番組「大島アワー」など入所者の意思に伴走する活動が行われている。

[2022までの取組み]

他の島とは異なる環境であることから、作品の制作プロセスや公開方法・展示場所などは、プロジェクトの活動プロセスの中で検討し、住民と来島者との関わりの中で、美術を通して入所者が生きてきた記録・記憶を伝え、地域と人の豊かな環境を構築するための活動を展開してきた。

入所者との交流を深め、島の内外のつながりを紡ぎ出す「やさしい美術プロジェクト」や地域と人の豊かな環境を整備してきた田島征三の活動を中心に、こえび隊の会期外も含めたガイドの実施など丁寧な活動を続けている。

2022年には、1人の入所者のこれまでの人生をモチーフにした「『Nさんの人生・大島七十年』-木製便器の部屋-(2019~)」や「海峡の歌/Strait Songs(2019~)」を引き続き展開したほか、入所者や看護師らから聞き取った物語を手芸にて作品化した「物語るテーブルランナー in 大島青松園(2019~)」やかつての入所者たちが自力で切り開いた散策路を作品化した「リングワンデルング(2019~)」に新たな要素を加え、展開した。

犬島

[特色・コンセプト]

1909年に銅製錬所が開設され、島の人口は、一時期3,000人を超えたが、1919年の製錬所の閉鎖などにより、人口は減少の一途を辿った。

経済産業省による「近代化産業遺産群」のひとつとして、製錬所跡地が認定され、この製錬所の遺構を保存し、環境に負荷を与えない美術館施設として再生するなど、犬島全体を「建築・現代アート・環境」による新たな循環型社会のモデルとすることを目指したプロジェクトを展開している。

[2022 までの取組み]

2008 年に近代化産業遺産である犬島製錬所の遺構を保存・再生した「犬島精錬所美術館」が開館した。その後、2010 年には犬島の集落に犬島「家プロジェクト」を開始し、以降、一部の作品を入れ替えながら展開してきた。また、2016 年に「犬島 ぐらしの植物園」を開園し、食べ物からエネルギーに至るまで、自給自足をしながら自然とともに暮らす歓びを体験できる場づくりを実施してきた。さらに、2022 年には、大宮エリーによる INUJIMA アートランデブーのシリーズを新たに展開した。

沙弥島

[特色・コンセプト]

かつて柿本人麻呂がこの島を訪れ、そこで詠んだ歌は万葉集に収められている。番の州工業地帯の大規模な埋め立て造成によって、1960 年代後半に東隣の瀬居島とともに陸続きになった。現在は、瀬戸大橋記念公園が整備され、夏場は「快水浴場百選」（環境省）に選ばれた沙弥海水浴場が多くの海水浴客でにぎわっている。

沙弥島をはじめ、与島地区 5 島、王越地区や坂出市の特徴をとらえ、地域の歴史や文化を活かした活動が行われている。

[2022 までの取組み]

2013 年から会場に加わり、2022 年で 4 回目の春会期を迎えた。沙弥島の新たなスポットとして親しまれている小高い丘の作品「階層・地層・層（2013～）」や「八人九脚（2013～）」は瀬戸大橋記念公園で、瀬戸内海を望むスポットとして継続。

また、2022 年には、坂出市出身の南条嘉毅による作品「幻海をのぞく（2022～西ノ浜）」では、西ノ浜に面した一軒家の中に砂と映像、増減する水を用いて瀬戸内海に海水が入る前の地形から現在まで続く雄大な瀬戸内海の歴史を再現した作品展開を行った。

2022 年には、沙弥島以外の与島や王越地区に作品展開が行われたことによって与島や王越にも多くの来場者が訪れた。

レオニート・チシコフ「月への道（2022）」は、旧沙弥小・中学校で学校全体を使用して作品展開を行っただけでなく、沙弥島から与島へと渡りながら体験する作品となり、与島においては鍋島灯台や浦城バス停に初めて作品展開が行われた。

秋会期期間中には王越地区において、新たな魅力となる場所づくりのキックオフイベントとしてオリーブの植樹を行った。今後は、さらなるオリーブの植樹や農小屋兼ギャラリーの建設を予定している。

本島

[特色・コンセプト]

優れた造船及び操船技術をもった塩飽水軍の本拠地として栄える。船方たちは人名（にんみょう）と称され、至る所に統治の歴史的遺産が残っている。日本人の手

で初めて太平洋を横断した咸臨丸の乗組員の多くは塩飽の水夫であった。人名の一部は、造船技術を活かし、宮大工や家大工として「塩飽大工」の名を世に知らしめた。また、江戸時代以降の歴史的建造物に使われてきた石材やその海上運搬とも縁が深く、「石の島」として日本遺産にも登録されており、塩飽勤番所跡、千歳座、笠島まち並保存地区など、島に存在する歴史ある地域資産を保存し、生かす活動を行っている。

[2022 までの取り組み]

2013 年から会場に加わり、2022 年で 4 回目の秋会期を迎えた。塩飽大工衆の復活を願い活動を開始させた「善根湯×版築プロジェクト（2013～笠島）」や、瀬戸内の美しさをヨーロッパに伝えたシーボルトをモチーフにした作品「シーボルトガーデン（2013～2019 泊）」、海辺に和船を思わせる立体作品を設置した「水の下空（2016～笠島）」のほか、本島の石を使って惑星の軌道をイメージした「ワールドライズ（2019～笠島）」、塩飽大工の建てた建物の中で柱や梁、畳や建具のもつ均整を利用した「レボリューション（2019～笠島）」など、島にちなんだ作品を展開してきた。また、重要伝統的建造物群保存地区の笠島集落を作品展開の基点とし、島の歴史ある地域資産を作品と共に紹介した。

2019 年には、タイのアーティストの食のワークショップに島内の飲食店が参加して、会期中にタイのメニューを提供し、毎日曜日は港でマルシェを展開した。

2022 年には、石と関連させた作品として「無二の視点から（2022～笠島）」や「SETOUCHI STONE LAB（2022～笠島）」などを展開したほか、島と本土側をつなぐ試みとして市街地でのサテライト展示も行った。また、塩飽諸島のエピソードを演劇化した「せとうち物語—塩飽編—」が、瀬戸内少女歌劇団により上演された。

高見島

[特色・コンセプト]

かつては蚊取り線香の原料である除虫菊の栽培が盛んで、真っ白な花が島を覆い尽くすほどであった。最盛期には 1,000 人を超えた人口も、殺虫剤の普及により除虫菊の生産が途絶えたことや、高度経済成長期時の関西への流出等を経て、今では極端に少ない。

約 25 度の急傾斜地に家が建ち並び、縫うように小路が伸びる独特の古い町並みと自然石の乱れ積み石垣が残る集落で、空き家を活用した作品展開を行ってきた。また、地域住民が中心となって地域独特の食文化である「茶がゆ」を振る舞うなど、来場者へのお接待も行われてきた。

[2022 までの取り組み]

2013 年から会場に加わり、2022 年で 4 回目の秋会期を迎えた。高見島におけるアート作品は、2013 年から 2022 年までは、京都精華大学チームが中心となり展開してきた。

古民家の壁に突き刺さったアクリル板を通じて光が室内へと射し込む「時のふる家（2016～浜）」、かつてそこで暮らしていた人々の生活や記憶を紡いだ「まなうら

の景色 2022 (2019～浦)」、現在は廃村となった板持地区をモチーフにし、会期ごとに新たな作品を追加し継続してアプローチしている「過日の同居 2022 (2019～浦)」など、島に残された伝統的な古民家や人々の暮らし、かつて栽培が盛んであった除虫菊などを題材にした作品を展開してきた。

2013年、2016年では高台に建つ家で展開された「海のテラス (2013～浦)」は、2019年からはより臨場感を味わえるよう、浦地区独特の石造りの集落の中に移転し、海に向かって突き出すようにテラスを設置。2022年には、テラス部分に「FLOW (2022～)」も展開され、作品を鑑賞しながら食事を楽しむ来場者が多く見られた。

また、2022年には新たに、陸地部側での作品展開を行った。かつての川湊付近に残る土蔵では、多度津に伝わる愛国美談をモチーフにした「海と路／一太郎やあい (2022 本通)」を展開し、旧酒造場では、月を追いかけてながら多度津の町並みを歩いたストップモーションの「Nocturne(Tadotsu) (2022 本通)」が展開された。また、多度津七福神と呼ばれる豪商の邸宅のなかで唯一現存している合田邸においては、多度津の歴史についての企画展示「多度津町－海陸交通の発展・近代化を支えた商人たち－ (2022 本通)」を行った。

粟島

[特色・コンセプト]

戦国時代は塩飽水軍の拠点となり、江戸時代から明治初期まで北前船の寄港地として栄えた。その後、1897年に日本で最初の国立海員学校が設立され、多くの船乗りを輩出したが、海運業の衰退で1987年に閉鎖された。その跡地に、粟島海洋記念公園として整備された「粟島海洋記念館」は、島のシンボルとなっており、90年間の歴史と誇りが今も色濃く残っている。

2010年から続く日比野克彦の「瀬戸内海底探査船美術館プロジェクト」を基軸に、瀬戸内海の歴史や環境を学び、その魅力を感じさせるアートプロジェクトを展開している。

[2022 までの取組み]

2013年から会場に加わり、2022年で4回目の秋会期を迎えた。海底から引き揚げた品々を展示する「一昨日丸 (2013～粟島港)」や「ソコソコ想像所 (2013～旧粟島中学校)」などの「瀬戸内海底探査船美術館プロジェクト (2010～)」を基軸に作品を展開している。また、使われなくなった郵便局を一部改装し、「漂流私書箱」を設置した「漂流郵便局 (2013～渦東)」が全国的な話題を集めた。2016年には旧幼稚園や島の廃校を使用した「思考の輪郭 (2016～旧粟島幼稚園)」、「過ぎ去った子供達の歌 (2016～旧粟島小学校)」などを展開した。2019年には科学捜査船「TARA (2019～粟島海洋記念館)」による活動記録やタラ号乗船アーティストの作品展示を行った。

2022年には、各地で活動を行ってきた TANEFUNe が「種は船 TARA JAMBIO アートプロジェクト (2022～粟島港ほか)」で調査船へアップデートした。西浜に「スタイルライフ (2022～)」、「い・ま・こ・こ (2022～)」などのインスタレーシ

ョン作品を展開した。また、栗島芸術家村では、「栗島アーティスト・イン・レジデンス」作家等の作品展示を行った。

伊吹島

[特色・コンセプト]

瀬戸内海の中央部、燧灘(ひうちなだ)に浮かぶ伊吹島は、讃岐うどんの出汁に欠かせない良質な煮干し(イリコ)の生産が盛んで、伊吹島沖で獲れたものは「伊吹いりこ」のブランドで出荷されている。また、独特の趣を湛え、日本で唯一、平安時代の京言葉のアクセントを残す島でもある。

島の活気ある漁撈文化を生かすとともに、島に点在する独特の歴史資産を明らかにする活動を展開している。

[2022 までの取組み]

2013 年から会場に加わり、2013 は夏、2016 以降は秋会期に参加。廃校の校庭に設置した「トイレの家(2013~旧伊吹小学校)」、漁網や浮きなどの漁具や生活用品を素材に島の人たちや小中学生らとともに作った「沈まぬ船(2013~2016 旧伊吹小学校)」、みかんぐみ+明治大学学生が島独特の材料を使用して建立した「イリコ庵(2016~伊吹八幡神社周辺)」、島の素材を使い、瀬戸内の風を感じさせる作品「Here,There,Everywhere:Project Another Country-Dap-Pay-(2016 北)」など、イワシ漁や島の暮らし、風俗に根ざした作品を展開した。

2019 年には、生命誕生の場である「出部屋」の跡地に、栗林隆による作品「伊吹の樹(2019~)」を展開した。また、島は膜であり、生命は海の縁どりを行き来し生まれ続けるというテーマのもと行ったパフォーマンス「島膜_ibuki」も好評であった。

2022 年には、伊吹島の暮らしを支えていた民具などを収集し、KASA「ものがみる夢(2022~旧伊吹小学校)によって旧伊吹小学校に『海の庭』と『島の庭』を展開した。ほかにも旧郵便局、旧造船所などで作品展開し、島の風土を来場者に感じてもらえる会場となった。

島のお母さん達有志は、手づくりの島の味「うららの伊吹島弁当」で来島者をもてなした。

高松港

[特色・コンセプト]

島への玄関口、海との出会いの場でもある高松港は、芸術祭が始まって以来、ヒト・モノ・コトが集まるマザーポートとしての役割を担ってきた。

人を送り出すだけでなく、交流拠点ともなるよう、アート作品やイベントを展開してきたほか、「産物」や「食」が集まるマーケットを設置し、芸術祭の来訪者に食の楽しみなども提供してきた。また、宿泊拠点ともなる高松港では、夜の港や街を楽しむプログラムや、来訪者を迎え入れる船の出入りの演出など、にぎわいと

おもてなしのプログラムも展開してきた。

[2022 までの取組み]

高松港に立つ、高さ 8 m のカラフルな 2 本の柱「Liminal Air -core- (2010～)」などのシンボリックな作品が設置されている。また、2010 年、2013 年には「高松うみあかりプロジェクト」で多くの市民が協働し、2016 年に続き 2019 年においても、地域ごとに独自性を有する獅子舞によるイベントを開催し、家族連れで大いにぎわった。また、アジアとのつながりを深める取組みとして「ベンガル島(2013)」、「瀬戸内アジア村(2016)」を展開したほか、栗林公園では、瀬戸内の風土や歴史文化などに根ざしたパフォーマンスと地元食材を使った料理を振る舞う「讃岐の晩餐会(2016)」を行った。2019 年には、島から高松港に帰ってきた来場者が夜間も作品を鑑賞できるよう、北浜アリーで「うちわの骨の広場(2019)」、「LEFTOVERS(2019)」などを展開した。

2022 年には、「高松市屋島山上交流拠点施設(愛称: やしまーる)(2022～)」がオープンしたほか、やしまーる内に広がる壮大な作品「屋島での夜の夢(2022～)」や、屋島とサンポートの 2 地域で展開する「プロジェクト『同じ月を見た日』(2022)」、うねるような屋根が特徴のランドマーク「四国村ミウゼアム エントランス『おやねさん』(2022～)」、瀬戸内地域の仕事歌と四国最古のオペラ作品「瀬戸内仕事歌 & 四国民族オペラ『二人奥方』(2022)」の上演など、屋島エリアにおいてダイナミックに作品を展開した。

宇野港

[特色・コンセプト]

1909 年に本州と四国を結ぶ鉄道連絡船の港湾として整備され、翌年には宇野線が開通し、同時に宇高連絡船が就航した。1988 年の瀬戸大橋完成に伴って宇高連絡船が廃止されたが、民間航路のフェリーターミナルとしての整備が進められた。

本州側から瀬戸内の島々への玄関口として、人流と物流の拠点を目指し、町がにぎわい、人が集うプラットホームを設置。アートトリップへの出発を盛り上げる始まるの場所であり、拠点場所として、現代アートの力を借りた地域の魅力が追い風となって、更に、新たなにぎわいが創出されている。

[2022 までの取組み]

宇野港のシンボルとして家庭の不要品を集めて作った「宇野のチヌ(2010～)」を設置し、2016 年にはコチヌも生まれた。宇野港「連絡船の町」プロジェクト(2010～2019)では、船や港にまつわるフォトコンテストを行い、街中での写真展示を行ってきた。「舟底の記憶(2013～)」や「海の記憶(2016～)」といった港を想起させる作品や、宇野みなと線 4 駅をアート化した「JR 宇野みなと線アートプロジェクト(2016～)」、「終点の先へ(2016～)」など、本州側の玄関口である特長を活かした作品のほか、瀬戸内の島々と造船所、自然と人工の風景が混在している場所から見えてくるものを表現した「斜めの構成 1 / 斜めの構成 2 / 水平の構成 3

(2019)」といった地域の歴史や文化に基づいた作品を展開した。

2022年には、街中への回遊や滞在につながるよう宇野港街中プロジェクトとして、街の面影を残す空き家を活用した「実話に基づく(2022)」、「時間屋(2022)」、「赤い家は通信を求む(2022)」の3作品を展開した。屋外では周辺の穏やかな風景と一体感をもつ「S.F.(Seaside Friction)(2022～日之出公園)」、「本州から見た四国(2022宇野港周辺)」を展開したほか、玉野に残る製塩の歴史から「汐まち玉野食プロジェクト たまのの塩」として、塩に着目した食の取組みも実施した。

香川県沿岸部

今後、香川県の沿岸部であるさぬき市内(候補地;志度の町並み、大串半島、津田の松原など)、東かがわ市内(候補地;引田の町並みなど)、宇多津町内(候補地;宇多津の町並みなど)で調査を行い、具体的な会場を選定する。

2-3 アーティスト選考

アーティストの選考は、作品設置場所等の諸条件、地域の素材や住民との関わりなどを考慮し、招待又は公募によって行います。選考に当たっては、作家の能力や実績、活動等についてできるだけ幅広い情報を収集し、円滑かつ効果的に選考を行うための体制を整えます。

招待：サイトスペシフィック(※)な作品制作や、コミュニケーションをテーマとする作品展開などに定評・実績のあるアーティスト、並びに新進気鋭のアーティストを国内外から招待します。

(※)サイトスペシフィック

特定の場所に帰属する性質を示し、美術作品の場合は、場所を活かした表現により制作された作品を指す。

公募：島々の魅力を発見し、地域資源を活かしたアートプロジェクトを広く国内外から公募します。新しい才能の発掘・育成の場とするとともに、事前広報の場としても活用します。

第3章 受入環境の整備

3-1 方針

3-1-1 基本方針

芸術祭の会場の多くは離島です。船に乗って島に渡り、作品にたどり着くまでのプロセス、決して便利とは言えない島の暮らしなどを体験することそのものがこの芸術祭の魅力であり、特徴ですが、一方でフェリーなどの海上交通の便数や島内の移手段、島内の宿泊や食事場所には限りがあることから、現状に即した受入環境を整えていくことが必要です。

島の体験そのものと利便性のバランス、昨今の各方面における人手不足の状況を見極めながら、海上交通や島内交通に関する対策に努めるほか、混雑の緩和のため、来場者の平準化に努めます。

また、来場者のニーズに応じた十分な情報を、来場者が事前に計画を立てる段階や、実際に現地を訪れてからなど、時機に応じて適切に提供するなど、来場者の利便性を高める取組みを進めます。

3-1-2 取組みの概要

船やバスなどの交通事業者や地元市町等との連携を図り、会期中の航路の開設や増便などを検討するとともに、規模の大きな島では、島内の二次交通の充実について検討します。

また、2019年から導入した混雑予想カレンダーを引き続き提供するなど、来場者の平準化対策を検討します。

さらに、会場となる島々や高松港、宇野港等に案内所を設置するなど、情報の提供や問合せへの対応が行える環境を整備します。

3-2 分野ごとの課題と整理

(1) 海上交通

会場となる島々を結ぶ交通アクセスの向上を図るため、会期中の臨時航路の開設や既存航路の増便、臨時便の確保に向け運航事業者と調整します。

また、来場者の利便性向上や乗船窓口付近での混雑緩和を図るため、フェリー共通乗船券の導入について検討します。

(2) 島内交通

直島、豊島、女木島、小豆島、本島などにおいては、地元市町等と連携しながら、作品展開も踏まえて既存バス路線の増便等を行います。また、ルートやダイヤの見直しが必要と考えられる路線のほか、レンタサイクル等の活用についても、関係者と調整します。

(3) 本土側のアクセス

公共交通機関の利用による来場に対応するため、島々の玄関口となる本土側の各港や会場までのシャトルバスの運行等について地元市町等と調整します。

(4) 混雑対策

混雑日、受入に余裕のある日をあらかじめ来場者が把握し、来場する際の参考にできるように混雑予想カレンダーを作成するなど、来場者の平準化を図る方策を検討します。

来場者が集中するような場所には、警備員を配置するなど混雑対策を行います。

また、夏会期を中心に、来場者が滞留する屋外での日除け対策などの熱中症対策を行います。

(5) インバウンド対策

公式ウェブサイトに芸術祭に関する情報を集約し、来場者が得たい情報を多言語で総合的に発信します。また、案内所では、外国語対応が可能な人員の配置や翻訳アプリ等のツールを活用するなど、海外からの来場者に対する受入環境の整備を検討します。

(6) 芸術祭鑑賞ツアー

ガイド付きツアーを実施することで、広範囲に点在する島々の歴史・文化や、作品を効率よく鑑賞でき、より深く芸術祭と島々を味わう機会を提供します。

(7) 案内所の設置

芸術祭のマザーポートとなる高松港に総合案内所を設置するほか、会場となる島々や本土側の港等にも案内所を設置します。案内所では、Wi-Fi 接続環境を提供するとともに、作品やイベントの案内など芸術祭に関する情報を提供します。設置に際しては、地元市町等と連携しながら、効率的な開設時間、人員配置を検討します。

(8) 救急体制の整備

緊急時に迅速かつ的確な対応ができるよう、会場別マニュアルを整備するとともに、傷病者が発生した場合は、消防局・本部等と連携して対応できるよう関係機関との調整を行います。

今後も新型コロナウイルス感染症の状況を注視し、感染状況を踏まえた対策を検討します。

(9) チケット

過去の芸術祭での来場者のチケット利用状況を検証し、前回に引き続き、電子パスポートなど利便性の高いチケットの仕組みを検討します。また、オンラインや販売事業者を活用しながら、様々な地域、世代の来場者が購入しやすい仕組みを整備します。

(10) グッズ

過去の販売実績などを分析しながら、魅力のあるグッズの開発を行うとともに、オンライン販売を活用する等、より多くの来場者の手に届くよう、効果的な販売戦略を検討します。

第4章 連携・コラボレーション

4-1 方針

芸術祭の盛り上がりは、今や会場となる島々だけにとどまりません。さまざまな主体が芸術祭に呼応して行う取組みが、全国、世界に広がりつつあります。

プロモーション活動などにおける企業等との連携、瀬戸内エリアや香川・岡山エリアで行われる文化事業との連携により、芸術祭の発信力を高めていきます。

また、未来の瀬戸内を担う若者を育成するため、学校との連携事業等に取り組みます。

4-2 企業パートナー・協賛

4-2-1 取組みの概要

芸術祭の趣旨に賛同していただける企業等から寄付・協賛を募り、芸術祭と社会とのつながりを広げていきます。また、企業等から芸術祭への期待や望ましい関わりを聞き取り、芸術祭と企業等との連携のあり方について検討します。

4-2-2 寄付募集の取組み

ウェブサイトやリーフレットを利用し、芸術祭の趣旨に賛同する幅広い層から寄付を募ります。

4-2-3 協賛募集の取組み

芸術祭の趣旨に賛同する企業に対し、現金、現物提供による協賛を募ります。より多くの協賛を得られるよう、協賛金額に応じた特典を設けます。

4-2-4 パートナー制度

一定金額以上の協賛や独自の事業により支援していただける企業・団体を「瀬戸内国際芸術祭パートナー」と称し、さまざまな形で連携を行うことにより、相互の協力関係を築きます。

4-2-5 SETOUCHI 企業フォーラム

有識者とのセッションや芸術祭会場の視察を通じて、サステナビリティと企業経営などについて改めて考察し、企業間ネットワークを構築するとともに、芸術祭開催年以外にも実施し、企業との持続的な関係性を構築します。

4 - 3 連携事業

4 - 3 - 1 県内連携事業

香川県内の市町や団体が実施する建築・アートを主体としたイベントなど、相乗効果が期待できる事業と連携し、芸術祭の来場者が各イベントを巡るよう促すことで、芸術祭の開催効果を広く波及させます。

4 - 3 - 2 広域連携事業

芸術祭の機運醸成や文化的発信を拡大していくため、芸術祭の開催年だけではなく、早い時期から、全国規模で開催されている国際芸術祭等と連携し、相互広報を実施します。

4 - 3 - 3 学校連携事業

香川県教育委員会や地元の中学校・高等学校等と連携し、未来の瀬戸内を担う子どもたちを育成するため、会場となっている島々の独自性や国外からの来場者が多い芸術祭ならではの特性などを活かして、さまざまな活動を展開するとともに、アーティストが制作現場で学生とワークショップを行ったり、学校で授業を行ったりするなど、自ら考える経験をすることにより豊かな心を育めるよう、学校教育との連携を深めていく。

第5章 芸術祭サポーター

5-1 方針

アーティストと地域をつなぎ、作品と来場者を結ぶ役割を担う重要な存在となるのが国内外から集まるサポーターです。地域行事への参加、作品制作の手伝い、作品やイベントの運営など、多くのサポーターが芸術祭に関わり支えています。次回展に向け、サポーターや関係組織の育成、相互連携に取り組みます。

5-2 ボランティアサポーター「こえび隊」

5-2-1 取組みの概要

ボランティアサポーター「こえび隊」は、2009年発足時から継続して島々に通い、芸術祭をさまざまな形で支えています。地域行事への参加や作品制作、運営等に取り組み、より地域に親しみ、学び、地域を開いています。住民やアーティスト、サポーター同士の交流を通して、作品を取り巻く人々を緩やかにつなげます。

5-2-2 具体的な取組み

こえび隊が芸術祭サポーターの中心となり、住民や企業サポーター等と協力しながら、芸術祭を支えています。地域行事や文化活動に参加するなど、住民との交流の機会を創出します。アーティストや住民とともに作品制作を行います。作品受付やメンテナンス、ガイドを行うなど、来場者がより島めぐりを楽しめるような活動に取り組みます。

新たなこえび隊参加者を広げるため、また現在活動しているこえび隊がより興味をもって活動するために、島々や芸術祭への理解を深めることができる勉強会やミーティングを開催します。各種メディアやSNS等を活用し、国内外のサポーターへ広く参加を呼びかけます。

5-3 企業・団体ボランティアサポーター

5-3-1 取組みの概要

地元の企業・団体や学校など、地域をよく知る人たちによる来場者へのおもてなしは、継続的な地域活性化の観点から重要です。芸術祭では多くの地元の企業・団体ボランティアサポーターが芸術祭に関わり、住民や来場者との交流を深めています。

5-3-2 具体的な取組み

地元の企業や団体に対して、芸術祭の趣旨やサポーター活動についての説明等を通じ、参加を呼びかけます。香川・岡山の大学を中心に、サポーター活動を行うことがアートを通じた地域振興を学び、多くの方とのコミュニケーションを図る場となることから、広く学生の参加を働きかけていきます。

第6章 広報

6-1 方針

芸術祭は、アートを媒介に、国内外から集うアーティストやボランティアと地域住民の協働により支えられており、その取組みが国内外からの多くの来場者の共感と呼んでいます。

そこに集う人々は、国、性別、世代、ジャンルを包摂した幅広い層となることから、多様な視点でアートの枠を超えた広報活動を行います。

また、瀬戸内の歴史、文化、自然、民俗や生活など地域をより深く知ってもらえるような広報活動にも取り組んでいきます。

さらに、香川県等と連携して、2025年に開催される大阪・関西万博の会場などで、芸術祭のPRに努めます。

6-2 具体的な取組み

6-2-1 国内向け広報

芸術祭の認知度、ブランド力を高めるとともに、開催意義を的確に伝える情報発信に努めます。

芸術祭のファン層と関係性が高いアート、建築、デザイン、観光等のメディアに加え、いわゆるアートファン層以外にもターゲット層を広げ、地域づくり、移住、経済、福祉などの社会課題を取り扱う専門メディア向けの情報発信にも取り組みます。

6-2-2 海外向け広報

次回芸術祭は、新型コロナウイルス感染症に関する水際対策が終了した後、初めての開催となることから、世界のアートファン層へのタイムリーな情報発信に努めます。

特に主要なターゲットとなる東アジア・東南アジアや欧米豪エリアへの情報発信やプロモーションについては、関係自治体、関係団体、地域DMO等と連携して重点的に取り組みます。

6-2-3 デジタル広報ツール

公式ウェブサイトについては、芸術祭の価値や魅力、開催情報やアクセスなど、必要な情報が分かりやすく網羅されるよう整備を進めるとともに、多言語による対応を図り、国内外に向けた情報発信につなげます。

また、インスタグラム等のSNSについては、特に若い世代や海外に向けて強い影響力をもつことから、より効果的でタイムリーな活用に努めます。

6-2-4 アナログ広報ツール

ポスターやリーフレット等のアナログ広報ツールについては、デジタル時代においても県内外での機運醸成などに重要であることから、より効果的な掲示・配布に努めます。

第7章 スケジュール

年	月	取組み	
2023	7 9	●取組方針策定 招待作家検討 作品公募	
	10 12		
	2024	1 3	●取組方針見直し（参加作家一部発表）
4 6			
7 9			
10 12		●参加作家発表 作品制作	
2025		1 3	●運営マニュアル策定
		4 6	芸術祭 2025 春会期
	7 9	芸術祭 2025 夏会期	
	10 12	芸術祭 2025 秋会期	